

特別活動

自己や集団の課題を見いだし、 多様な他者と共に解決できる生徒の育成

VUCAと呼ばれる時代において、受け身ではなく、当事者として多様な他者と人間関係を形成し、積極的に集団に参画し、周りとの関係性を意識しながら自身の生き方を真剣に考え、自己実現を果たす生徒の育成が求められている。異年齢を含めた集団との関わりを通して、課題を見いだし、解決する過程において、未来を力強く切り開く資質・能力を育てていきたい。



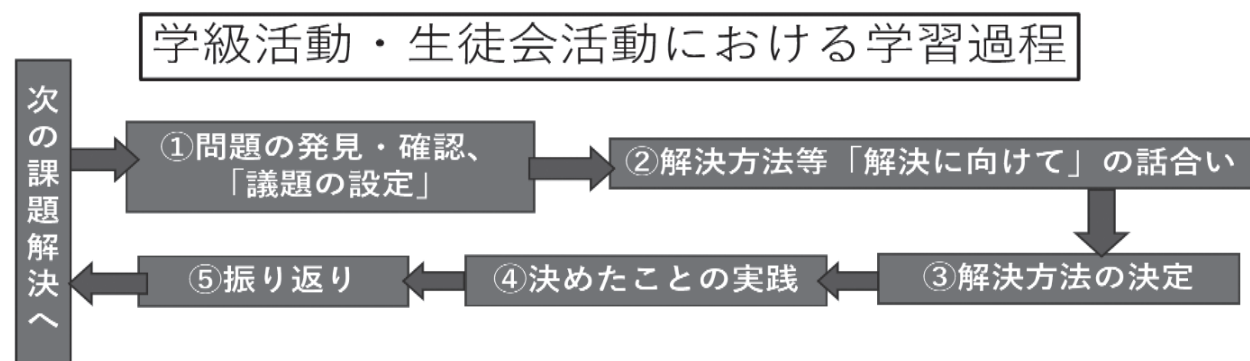
県中教研 特別活動部 全県部長
三条市立第一中学校

校長 田村 和弘

特別活動における学習過程と深い学び

中学校学習指導要領の学級活動の目標には「課題を見いだし、解決するために話し合い」、生徒会活動の目標には「諸問題の解決に向けて・・・(略)・・・自主的・実践的に取り組む」という文言が入っている。この文言は特別活動を通して「多様な他者と協働することの意義の理解」・「合意形成・意思決定する能力」・「自己実現を図ろうとする態度」等の資質・能力を身に付けるには、下の図のように、学習指導要領解説特別活動編（以下：解説）で

示されている「課題（問題）を見いだし、解決する学習過程」を含んだ題材を構成する必要があることを示している。生徒が集団や社会の形成者としての見方・考え方（自己・集団・社会の問題を捉え、人間関係形成・社会参画・自己実現に結びつける）を働かせ、この学習過程を1つのサイクルで終わらせることなく、継続させることで、深い学びを実現する。



中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編を基に作成 ※「 」は生徒会活動

異学年交流を通した学びの広がり・深まりと自己肯定感の醸成

解説の第4章第2節4では「異年齢集団の交流は、他者の役に立つ喜びを体得、自己肯定感の醸成に寄与する」と異年齢集団の交流の効果を述べている。下学年との交流の際は、上学年がリードする立場になるので、自己肯定感を得やすい。また、交流の対象が上学年になると、自分たちが経験や学習していないことを基に話が展開され、学びが広がったり、深まったりする可能性が高くなる。

生徒会活動を中心とした実践においては、小学6年生の関するアドバイスをを行う。アドバイスを受けて小学生の表情が和らいだり、

参考になったとのコメントがあったりすれば、中学生の自己肯定感が高まる。また、小学生の不安が中学生のよりよい学校づくりのヒントを与えることになり、解決に向けての話合いの活性化につながり、学びを促進する効果が期待できる。

学級活動(3)を中心とした実践においては、中学2年生が3年生からアドバイスを受けたり、意見交換をしたりすることから、今後の中学校生活の充実や進路選択等に関する考え方が広がったり、深まったりする効果が期待できる。

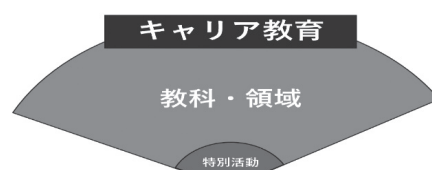
キャリア教育の要としての特別活動

中学校学習指導要領(平成29年告示)の総則第4の1(3)で「社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要として各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」と記述され、特別活動はキャリア教育の要として位置づけられている(右下図は筆者のイメージ)。学級活動(3)「一人一人のキャリア形成と自己実現」はキャリア教育の具体的実践の場として重要な位置を占めると考えられる。

学級活動(3)を中心とした実践においては「道徳」で自分らしい生き方を模索する作者の姿と自己との「対話」を通して、また「英語」では憧れる人物や夢に関する表現を「他者から評価」してもらうことを通して、自身の課題を捉え、今後の生き方につなげる。

生徒会活動を中心とした実践においては、小学生との交流を通して味わうことのできた自己肯定感や中学生のキャリア発達課題である「肯定的自己理解と自己有用感の獲得」につながる。

これらの題材での学んだことを一過性のものでせず、振り返りを記録したものを「キャリア・パスポート」等ポートフォリオとして保管し、自己評価や他者評価(教師との面談等)の場面で活用し、生徒のキャリア発達につなげることがキャリア教育の要としての特別活動の役割を果たすことにつながる。



キャリア教育と特別活動の関係

特別活動 重点方針

「学級活動、生徒会活動及び学校行事」の相互の関連を見通した指導計画を作成し、集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせる場面を意図的、計画的に設定し、主体的・対話的で深い学びの実現を通して、次の能力・態度を育成する。

- 多様な他者と協働する集団活動の意義を理解し、意義に基づいた行動を取ることができる能力
- 集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができる能力
- 自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活や人間関係をよりよく形成するとともに、人間としての生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度

特別活動 <中越地区／小千谷市中教研>

11月21日(木) 研究会開催

研究主題：夢や希望をもち、なりたい自分を実現しよう
とする生徒の育成
～特別活動を要とするキャリア教育の視点から～

単元名：「2年：理想の3年生になるために」

会場校：小千谷市立南中学校

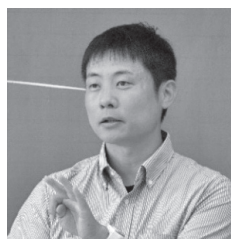
公開：1学級

授業者：中川 芳隆

指導者：上越教育大学大学院 教授 山田 智之 様



研究推進責任者
小千谷市立南中学校
近藤 尚子



教科・領域担当者
小千谷市立南中学校
中川 芳隆

こんな深い学びの姿を目指します

生徒が自分の考えをもち、他者と交流しながら、さらに自分の考えを広げ、新たな気づきや違った視点を自分の未来に生かそうとする姿を目指します。教育活動全体でキャリア教育を展開する中で、生徒は自己実現につながる多くの気づきをしています。特別活動（学級活動（3））でその気づきをつなげて意識化させます。

主な手立て（「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連）

ポイント1（「深い学びの技法」のNo.1）

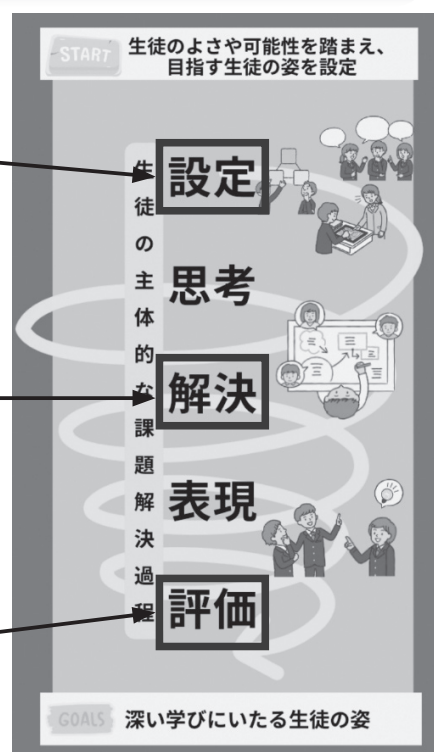
各教科等での学びを振り返り、将来の自分発見につながる課題を設定する。

ポイント2（「深い学びの技法」のNo.8）

異なる考えを参考にしながら、根拠を明確にし、自分の考えを再形成する。

ポイント3（「深い学びの技法」のNo.20）

授業で学んだことから、自分に取り組む課題を設定し、次の学びへつなげる。



単元(題材)の様子

① 道徳「私は14歳」では、自分らしい生き方を模索する作者の姿から、自分自身と対話を重ねていきます。

これまでの自分を振り返り、自分の良さを生かし伸ばすための課題設定につなげます。

ポイント1



② 英語では、憧れる人物や夢についてスピーチをします。自分が作成した原稿をグループで再考して発表につなげます。これにより、内容や構成、表現の工夫に気付き、英文の精度を上げることが期待できます。

発表では、互いに評価し合い、自分の目標が達成されたかを振り返ります。他者から認められたことや改善点に気付き、次のプロジェクトへの目標や課題を設定することができます。

ポイント2・3



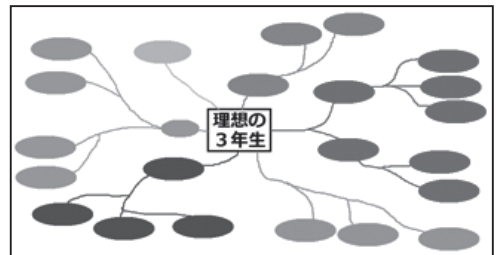
③ 学級活動では、生徒会選挙を控え、自分たちが学校を率いる立場になることを確認し合います。生徒会活動の仕組みや役職を確認し、それぞれの立場でリーダーとして活躍するための意識の醸成を図ります。

研究会

④⑤⑥ 学級活動では、自分とは違う意識や視点をもって臨んできた3年生の声を直に聞くことで、学校のリーダーに必要な見方や考え方に気付き、心構えをもつ準備につなげます。マインドマップを作成し、可視化することで、考えを整理し、確認し合います。作成したマインドマップを振り返り、自分が大切にしたいことを比較し合い、考えを深めます。

目標達成のための要素を練り合う活動が、将来の自分の姿を想像し、その姿に向けて必要な短期目標設定の動機付けにもなります。

ポイント2・3



要素1	要素2	要素3	要素4	要素5	要素6	要素7	要素8
要素1	要素2	要素3	要素4	要素5	要素6	要素7	要素8
要素1	要素2	要素3	要素4	要素5	要素6	要素7	要素8
要素1	要素2	要素3	要素4	要素5	要素6	要素7	要素8
要素1	要素2	要素3	要素4	要素5	要素6	要素7	要素8
要素1	要素2	要素3	要素4	要素5	要素6	要素7	要素8
要素1	要素2	要素3	要素4	要素5	要素6	要素7	要素8
要素1	要素2	要素3	要素4	要素5	要素6	要素7	要素8

⑦ 学級活動において、各自の短期目標実践を振り返って自己評価します。それを生かした新たな課題を設定します。

ポイント3

特別活動 <下越地区／阿賀野市・胎内市・北蒲原郡中教研>

10月30日(水) 研究会開催

研究主題：他者を認め、望ましい人間関係を築いていく
活動の工夫

～自ら課題を見つけ、共有して課題解決を目指す生徒の育成～

単 元 名：「3年：なかよし子どもサミット」

会 場 校：阿賀野市立水原中学校

公 開：3学年

授 業 者：前田 健太郎

指 導 者：村上市立村上南小学校 校長 磯部 睦 様



研究推進責任者
阿賀野市立京ヶ瀬中学校
松川 香奈恵



教科・領域担当者
阿賀野市立水原中学校
前田 健太郎

こんな深い学びの姿を目指します

望ましい人間関係を基盤とし、多様な考え方を受容し、認め合いながら、自身の考えを伝えたり、広げたり、深めたりして、お互いが折り合いをつけた納得解を導き出す姿を目指します。小中での交流活動を通して、安心できる雰囲気をつくり、小中それぞれが抱える課題を、一緒に考える活動を行い、集団としての学びを深めます。

主な手立て（「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連）

ポイント1（「深い学びの技法」のNo.8）

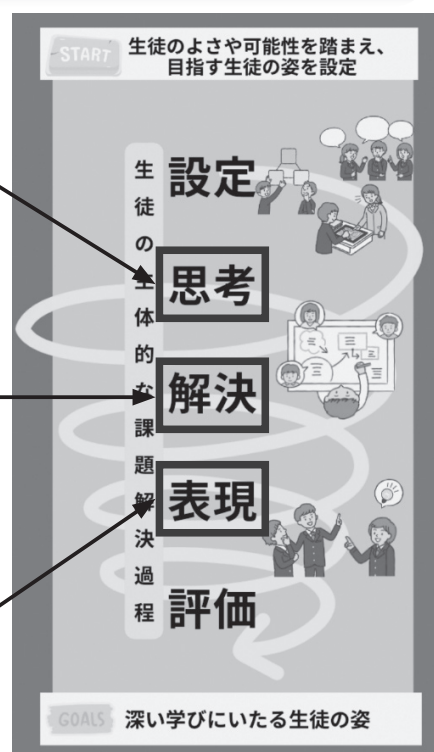
小グループで交流活動を行い、異なる考えに触れる機会を設定する

ポイント2（「深い学びの技法」のNo.10）

課題を見だし、話し合いを通して、さまざまな立場から課題解決について考える。

ポイント3（「深い学びの技法」のNo.15）

活動を振り返り、学んだことや感じたことを自分の言葉でまとめたり、伝えたりする。



単元(題材)の様子

① 生活アンケートから、学校の課題を見いだします。学年、学級、自分自身の生活など、さまざまな場面を振り返ることで、課題解決の意欲が高まります。

小学校でも同様にアンケートを実施し、解決する課題を明らかにします。

ポイント2

② 課題を一つに選定し、学級内で課題解決のための話し合い活動を行います。

また、「なかよし子どもサミット」を行うことを確認し、話し合いのルールを確認します。

中学入学当時の悩みや気持ちを想起させることで、自身の経験をもとに小学生の気持ちに共感しながら、話し合いを進めることができるようにします。

ポイント2



研究会

③ 研究会では、小中連携事業「なかよし子どもサミット」として、中学校区3校の小学6年生と中学3年生が、話し合い活動を行います。多様な考えに触れることができるよう、異校種のグループをつくり、学校生活での課題を解決するための方策について考えます。

交流活動を通し、小学生と中学生が互いに安心して関わるができるようにします。

中学生が自分の経験をもとに小学生の悩みに共感しながら一緒に考えたり、中学校の課題について、小学生の意見を取り入れながら考えたりする過程で、互いに折り合いをつけながら学びを深めていく姿を目指します。



ポイント1・2・3

④⑤ 生徒会の活動として、「なかよし子どもサミット」で確認した課題の方策を整理します。

その後行われる「いじめ見逃しゼロスクール集会」では、全校生徒で課題解決の追加の方策を考えます。話し合いの中で示された様々なアイデアを織り込むよう意識することで、多様な意見に耳を傾け、集団で合意形成したことを日々の生活につなげ、実践していきます。



ポイント2・3